

# 社会変換機とサブカルチャーメディアの成立

## ——雑誌『ぱふ』を中心に——

東京大学大学院 金泰龍

### 1. 研究目的

「オタク」は、マンガ・アニメ・SFなどのサブカルチャーを特集な方式で消費する人々ある。一時、潜在的な犯罪者や社会的病理現象として考えられた「オタク」は、以後日本のサブカルチャー産業が成長と共に、その文化を支える消費者としてここ20年間注目を浴びてきた。「オタク」文化の起原を関連して、よく1970年代末から1980年代初頭のアニメ雑誌が注目されてきた。ところが、既存の研究は「オタク」文化という必然的な結果の「原因」として雑誌を想定し、その中から行われる読者の実践に着目した結果、その雑誌とメディアの歴史性を十分に考察できなかった。そのような文脈で本報告は、1970年代後半から1980年代初頭にかけての『ぱふ』というマンガ専門誌の変遷をたどることによって、当時日本のマンガとその周辺のジャンルのメディアの成立過程とその中でのサブカルチャーの受容方式とそのオーディエンス象の変化を考察していく。

### 2. 研究対象と方法

本報告は1978年から1984年までの雑誌『ぱふ』の分析を行う。便宜上『ぱふ』という誌名を用いたが、この雑誌は1974年無名のタウン誌で創刊され、何回かのコンセプト、あるいは誌名変更を通じて1978年頃から全国に売れるマンガ専門誌になり、以後にも様々な事情で雑誌のスタイルが変化してきた。そのような変化は単に『ぱふ』という雑誌だけの問題に留まらず、当時の若者文化の変容を背景にマンガとその周辺のジャンルの関係性とその受容方式の変化を示すよい事例である。そのような文脈で、本報告は雑誌『ぱふ』を分析対象に、その読者のコミュニケーションはもちろん、誌面構成や編集スタイルの変化を歴史的に検討していく。

### 3. 結論

分析の結果明らかになったことは次のようである。まず、『ぱふ』は、1970年代後半の日本社会の若者文化の多岐化を背景にマンガというジャンルを中心に成立した雑誌メディアである。初期の『ぱふ』マンガを独自のメディア性を持つジャンルとして捉え、それに対する真剣な「知識」や「教養」を伝達を目指していた。ところが、時間の流れと共に軽い「情報」や「イメージ」が誌面を中心に占めるようになり、それを媒介にマンガとアニメもほぼ区別されないジャンルとして取り扱われるようになる。その過程で最も必要な要素はキャラクターで、初期の『ぱふ』では作品から脱却したキャラクターを消費する読者は、「ミーハー」呼ばれながら軽蔑の対象だったが、1980年代初になると誌面からそのような消費はほぼ一般化され、そのような読者を呼ぶ用語も「ロリコン」という異なるニュアンスの用語で代替されるようになる。

### 参考文献

金泰泰、2016、「70年代の漫画マニア文化の形成と変遷 —『COM』からコミックマーケットに至るまで—」東京大学社会情報学府修士学位論文。

永田大輔、2011、「『アニメおたく / オタク』の形成におけるビデオとアニメ雑誌の『かわり』 -- アニメ雑誌『アニメージュ』の分析から」『社会学ジャーナル』36号 pp. 56 - 76、筑波大学社会学研究室。

團康晃、2013、「『おたく』の概念分析—雑誌における『おたく』の使用の初期事例に着目して—」『ソシオロゴス』37号 pp. 45 - 64、ソシオロゴス編集委員会。

吉見俊哉、2009、『ポスト消費社会』シリーズ日本近現代史 9巻 岩波新書。